

第2回 「埼玉県学力・学習状況調査の今後の在り方」
に関する有識者会議

令和7年5月19日(月)

9:00 ~ 11:00

次 第

1 開会のことば

2 議事

(1)前回の振り返り

① 概要(事務局から)

② 質疑

(2)大規模学力調査結果と日常の学習データの活用の在り方について

① 説明

ア 一人一台端末を活用したラーニング・アナリティクス(日常の学習データの活用)について

京都大学 学術情報メディアセンター 教授 緒方 広明 氏

イ 総括的評価と形成的評価を両立する学習評価システムの構築について

株式会社内田洋行
株式会社教育測定研究所
東京書籍株式会社

② 質疑

③ 協議

3 その他

4 閉会のことば

第2回「埼玉県学力・学習状況調査の今後の在り方」
に関する有識者会議 出席者名簿

1 委員

| | 氏名 | 職名 | 備考 |
|----|--------|----------------|----|
| 1 | 植田 みどり | 国立教育政策研究所総括研究官 | |
| 2 | 緒方 広明 | 京都大学教授 | |
| 3 | 関口 睦 | 埼玉大学教授 | |
| 4 | 寺尾 尚大 | 大学入試センター准教授 | |
| 5 | 中室 牧子 | 慶應義塾大学教授 | |
| 6 | 益川 弘如 | 青山学院大学教授 | |
| 7 | 下野戸 陽子 | 本庄市教育委員会教育長 | |
| 8 | 伊藤 美由紀 | 杉戸町教育委員会教育長 | |
| 9 | 福島 みどり | 川越市立中央小学校長 | |
| 10 | 阿部 仁 | 蕨市立東中学校長 | |
| 11 | 齋藤 靖子 | PTA | 欠席 |
| 12 | 二田 景子 | PTA | |

2 教育局・事務局職員

| | 氏名 | 職名 | 備考 |
|----|-------|-----------|-----|
| 1 | 吉田 勇 | 市町村支援部長 | |
| 2 | 岡島 満 | 市町村支援部副部長 | |
| 3 | 山川 喜葉 | 義務教育指導課長 | 事務局 |
| 4 | 矢口 岳人 | 教育指導幹 | 事務局 |
| 5 | 普川 良和 | 主幹 | 事務局 |
| 6 | 高橋 史行 | 主任指導主事 | 事務局 |
| 7 | 松下 洋介 | 主任指導主事 | 事務局 |
| 8 | 丸橋 直樹 | 指導主事 | 事務局 |
| 9 | 杉崎 亮 | 指導主事 | 事務局 |
| 10 | 岩崎 貴紘 | 指導主事 | 事務局 |
| 11 | 島田 直也 | 指導主事 | 事務局 |
| 12 | 山崎 喬弘 | 主査 | 事務局 |
| 13 | 瀧川 晃平 | 主任 | 事務局 |



埼玉県マスコット「コバトン」

第1回「埼玉県学力・学習状況調査の今後の在り方」に 関する有識者会議の振り返り

令和7年5月19日(月)

埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課

第1回有識者会議における説明事項

- 1 埼玉県学力・学習状況調査の成果と課題（事務局）
- 2 イギリス(イングランド)の学校教育におけるデータ活用
（国立教育政策研究所 総括研究官 植田 みどり 委員）
- 3 次世代の学力アセスメントに関する学術的な議論の動向
（大学入試センター 研究開発部 准教授 寺尾 尚大 委員）

1 事務局報告「埼玉県学力・学習状況調査の成果と課題」

【これまでの成果】

- データ分析から、「主体的・対話的で深い学び」と学級経営が非認知能力・学習方略の向上に寄与することが明らかになった。
- 経験や勘に頼らない数値に基づいた指導が行われるようになった。
- 全国学力・学習状況調査の正答率が向上した。

【今後の課題】

- データ取得の頻度や方法の改善

【有識者会議での意見聴取の観点】

- ①教育施策検証のためのデータ取得・分析の在り方
- ②個人の学習状況改善のためのデータ取得・分析の在り方
- ③効率的・効果的な施策の実施

2 植田委員「イギリス(イングランド)の学校教育におけるデータ活用」

【学校の権限とデータ活用】

- 学校が財務、教育課程、施設管理、人事管理の全権を持ち、データを活用して学校改善や授業改善を行う。

【学力とアセスメント】

- 四つのキーステージに分かれたナショナルカリキュラムに基づき、
日々の学習実績とナショナルテストの結果を活用。

【パフォーマンス測定】

- オフステッドの監査結果やナショナルテストの結果を総合的に蓄積し、National Pupil Databaseを使用して年3回データ収集。
- データには、学力テストの結果だけではなく、児童生徒の出席状況や社会経済的なバックグラウンドなど、様々な情報が含まれる。

2 植田委員「イギリス(イングランド)の学校教育におけるデータ活用

【データの活用】

- 集まったデータを研究者や民間機関が分析し、その分析結果を学校が活用している。
- School Performance TableやAnalyse School Performance(ASP)を通じてデータを公表し、学校ごとの分析や地域間の比較が可能。

【MIS(Management Information System)の導入】

- 各学校はMISを導入し、日常的なデータを一元管理・分析。学校のニーズや予算に応じてカスタマイズされ、教員のサポートや研修も提供。
- これにより、学校は日常的にデータを活用した授業改善や学校改善を行うことができる。

3 寺尾委員「次世代の学力アセスメントに関する学術的な議論の動向」

【教育測定や評価の目的】

- **総括的評価**：学習期間の最後に**学力の到達度を測定**し、選抜、資格認定、**施策の成果評価**に利用。
- **形成的評価**：学習期間の途中で**学力の進捗状況を測定**し、**学習改善**、**授業改善**に利用。
- **診断的評価**：学習期間の前に学習の前提条件や学習ニーズを把握し、授業立案や介入方針決定に利用。

【埼玉県学力・学習状況調査について】

- 欧米の学力調査と同様、**基本的には総括的評価**である。
- **「学力の伸び」は縦断的個人内評価であり、形成的評価の一種**であるが、**形成的評価・縦断的個人内評価としての条件を十分に満たしているとは言えない。**

3 寺尾委員「次世代の学力アセスメントに関する学術的な議論の動向」

【コンピューターを用いたテスト(CBT)】

○大きく三つの世代にわけられ、第三世代は個別最適化をキーワードとし、形成的な評価の側面が強く、学習と評価が一体化。

○目的に応じて、総括的評価と形成的評価をベストミックスにしていくことが必要。

○アメリカでは、総括的評価と形成的評価を行う

「Smarter Balanced Assessment」というツールが開発された。

【埼玉県学力・学習状況調査の今後についての論点】

○施策→結果指標の枠組みについて、どの程度の精度で、どれくらい継続的に見ていきたいかを考える必要がある。

○児童生徒や保護者へのフィードバックとしての形成的評価にどう向き合うか。



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

一人一台端末を活用した ラーニング・アナリティクス (日常の学習データの活用) について

緒方 広明¹・濱田 さとみ²

¹京都大学 学術情報メディアセンター 教授

²京都大学大学院 情報学研究科 博士後期課程2回生



Learning and Educational Technologies Research Unit



Evidence-Driven Education Research Council

本日の内容

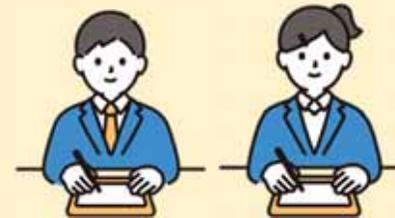
1. 日常の学習データとは
2. 日常の学習データの活用例
3. 既存の学力調査の課題
4. 埼玉県学力・学習状況調査×日常データの活用例
5. 緒方研究室のLEAFシステムのご紹介

1. 日常の学習データとは

| 分類 | 本人情報 | 活動情報（学習ログ） | 挙動・生体情報（対象外） |
|--------|---|---|--|
| データの内容 | <ul style="list-style-type: none"> 学籍情報 成績評定 資格 ポートフォリオ | <ul style="list-style-type: none"> システムの利用履歴 デジタル教材の利用履歴 テスト結果 レポート | <ul style="list-style-type: none"> 発話 動作 視線 表情 脈拍 血圧 |

- どの教材を閲覧したか
 - どの動画を視聴したか
 - 教科書のどのページを開いたか
 - ページをどのくらいの時間開いていたか
 - 教材のどこをクリックしたか
 - 教科書のどこにマーカーをひいたか
 - どのテストを受けたか
 - テスト結果
- など

例



ONCE UPON A TIME there were four little Rabbits, and their names were—
 Flopsy,
 Mopsy,
 Cotton-tail,
 and Peter.
 They lived with their Mother in a sand-bank, underneath the root of a very big fir-tree.

緒方広明, 江口悦弘, 学びを変えるラーニングアナリティクス: データをAIがもたらす教育革命. 日経BP, 2023.

2. 日常の学習データの活用例①

授業場面：生徒の「わからない」を可視化



PETER got down very quietly off the wheelbarrow, and started running as fast as he could go, along a straight walk behind some black-currant bushes.

Mr. McGregor caught sight of him at the corner, but Peter did not care. He slipped underneath the gate, and was safe at last in the wood outside the garden.

マーカー色
黄色：わからない
赤色：重要

ダッシュボードでは
クラス全体のマーカー記録が
集約され、重ねて表示される

→先生は多くの生徒が
つまづいている箇所を
一目で把握でき、指導に反映できる



→生徒も自分の理解状態と
クラス全体の理解状態を
比較することができる



2. 日常の学習データの活用例②

夏休み場面：生徒の「理解状況」「進捗」の把握

横軸：
生徒数



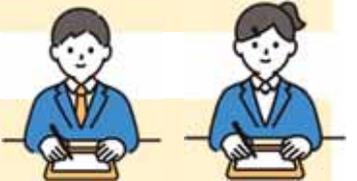
ダッシュボードでは
クラス全体の正誤情報が集約される
→先生は多くの生徒がつまづいている箇所を
一目で把握でき、指導に反映できる



横軸：
生徒順位



ダッシュボードでは
クラス全体の取り組み状況が可視化される
→生徒は夏休みでもクラスメイトを
身近に感じながら学習を進めることができる



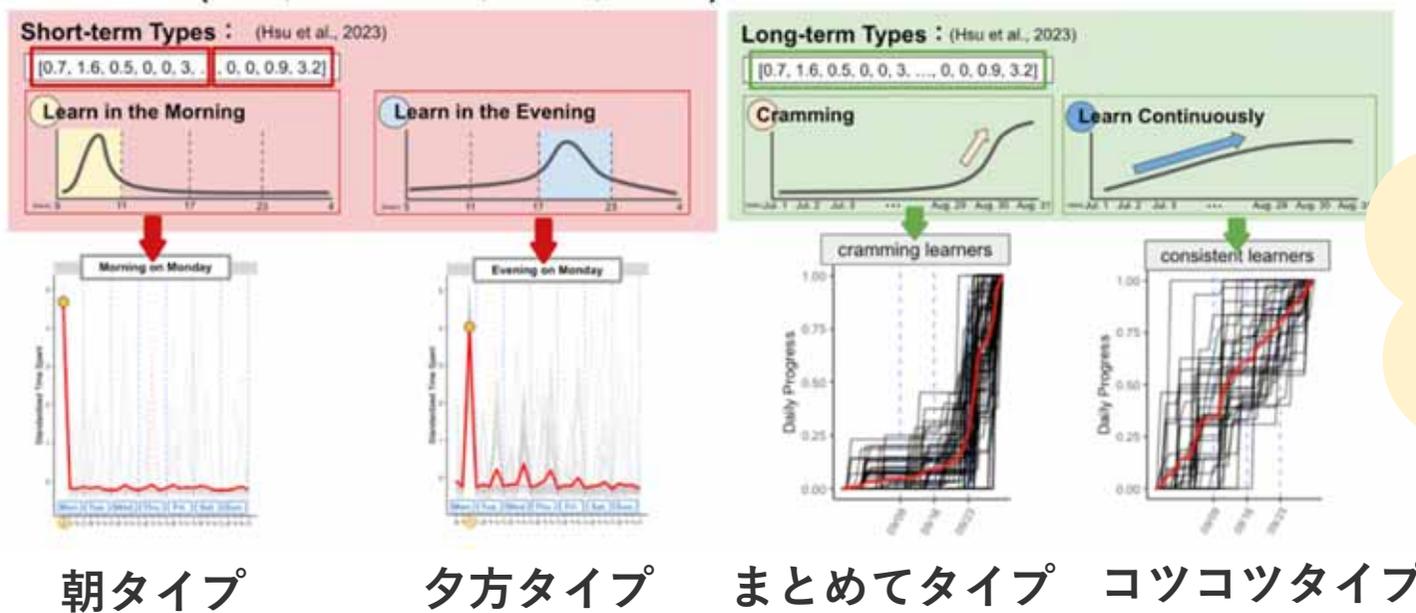
H. Kuromiya, R. Majumdar, I. Horikoshi, and H. Ogata, "Learning analytics for student homework activities during a long break: Evidence from K-12 education in Japan," RPEL, vol. 19, pp. 034–034, Mar. 2024.

2. 日常の学習データの活用例③

授業・夏休み場面：生徒の「学習習慣」の把握

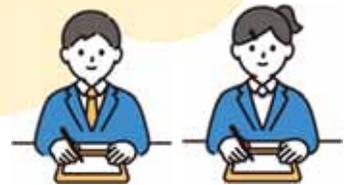
短期的な学習習慣

長期的な学習習慣



従来把握が難しかった
学習習慣が
分析で明らかになる

→生徒はエビデンスに
基づいて自身の学習習慣
の構築が可能に



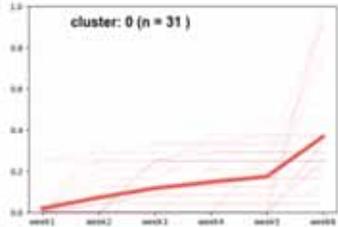
C.-Y. Hsu, I. Horikoshi, R. Majumdar, and H. Ogata, "Learning Habits Mining and data-driven support of building habits in education," International Conference on Computers in Education, Dec. 2023.

2. 日常の学習データの活用例④

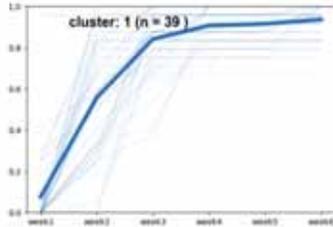
授業・夏休み場面：生徒の「学習の取り組み方」の把握

課題の進め方のパターン

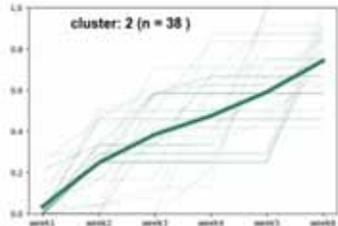
課題未完了群



早期完了群



コツコツ完了群



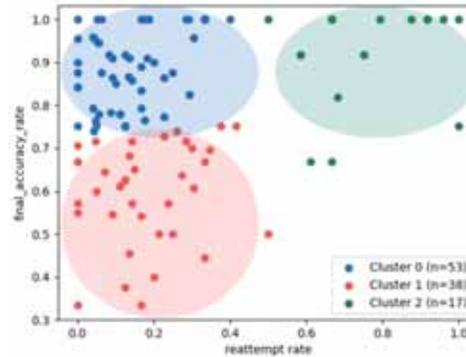
解き直し行動のパターン

理解済み生徒群

解き直した問題数：少ない
最終的な正答率：高い

高努力の生徒群

解き直した問題数：多い
最終的な正答率：高い



低努力の生徒群

解き直した問題数：少ない
最終的な正答率：低い

従来把握が難しかった
学習の取り組み方が
分析で明らかになる

→先生は学習方略に
踏み込んだ指導が可能に

→生徒は取り組み方
の改善が可能に



S. Hamada, CY, Hsu, I. Horikoshi, & H. Ogata,

“Social Process Awareness: Extracting Learning Process Patterns for Actionable Formative Feedback,” ICLEA 2025. (Under Review)

3. 既存の学力調査の課題①

日常的な改善につなげることができない



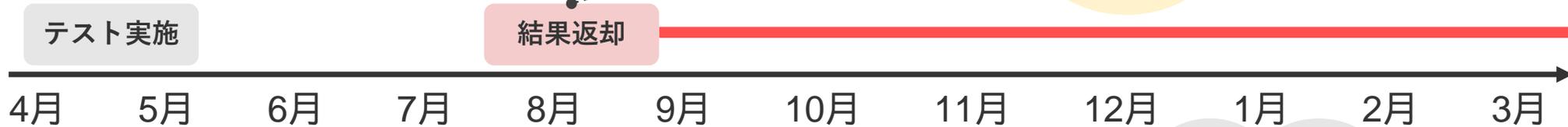
3. 既存の学力調査の課題②

日常的な改善を確認することができない

結果返却によって
自分の学力の伸びや
改善点がわかる



中1



約1年後

中2

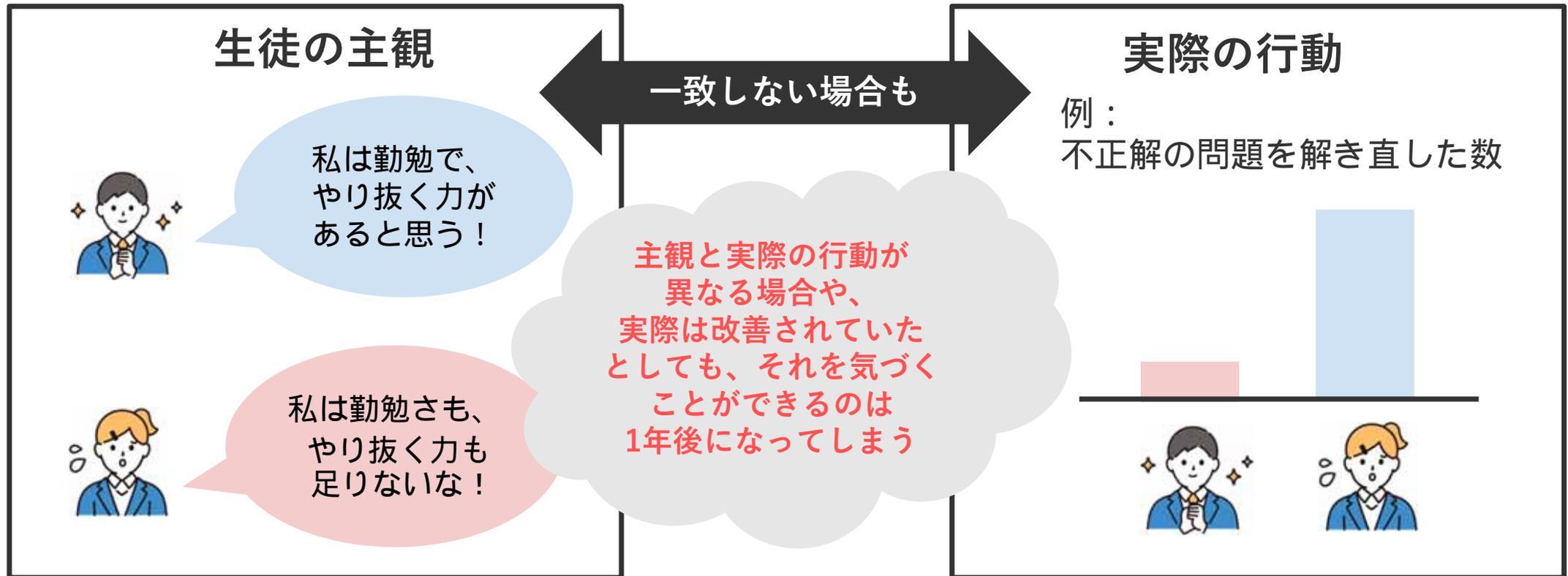


しかし、改善点を踏まえた
自分の行動の結果を
確認できるのは1年後
→ 日常的な確認ができない



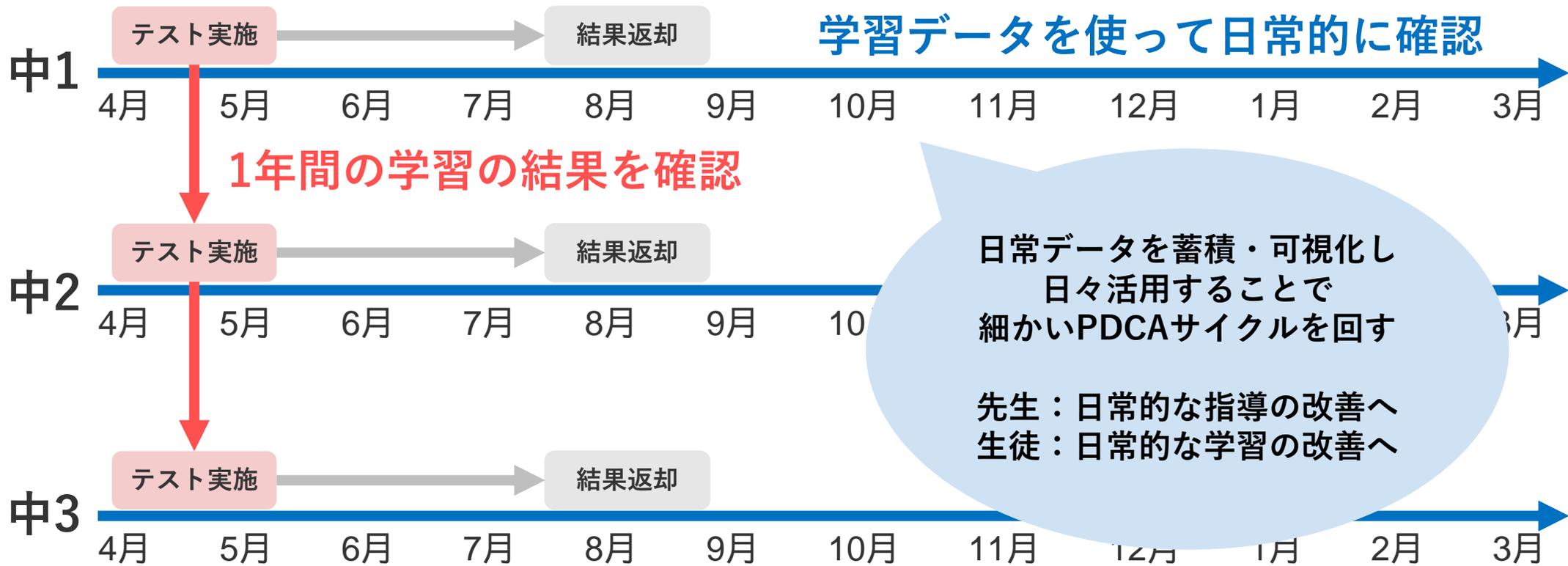
3. 既存の学力調査の課題③

生徒の主観頼りの「非認知能力」や「学習方略」の評価



4. 埼玉県学力・学習状況調査 × 日常データの活用例①

総括的評価（学力・学習調査）と形成的評価（日常的な確認）の組み合わせ



4. 埼玉県学力・学習状況調査 × 日常データの活用例②

生徒の主観と実際の行動のマッチング

例：可視化された生徒の日常データ

私は勤勉で、
やり抜く力が
あると思う！

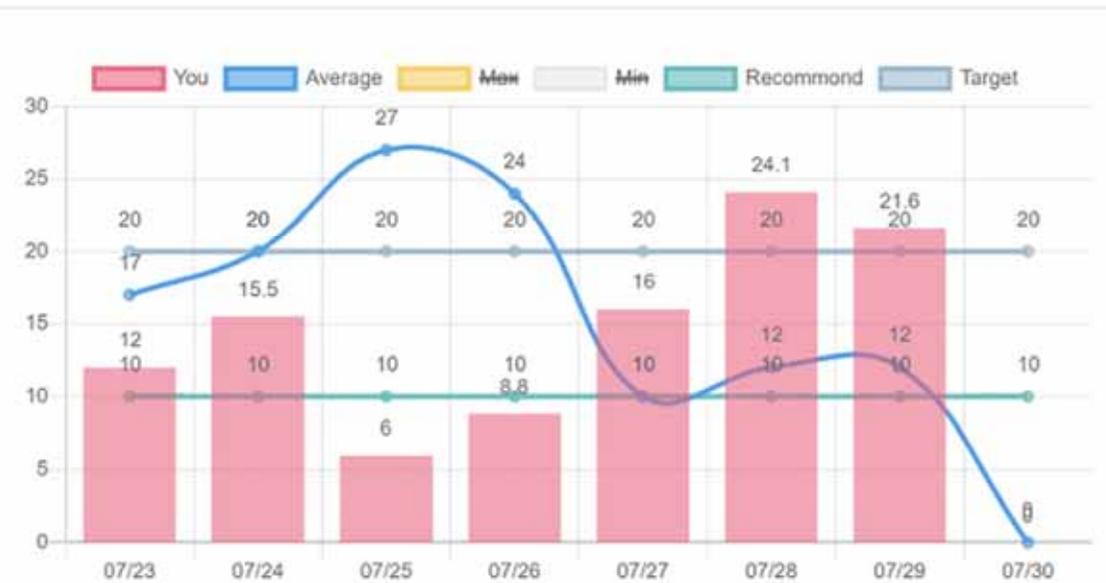
ただ
その維持が
まだ課題だな



可視化された自分の履歴を見ながら
日常的に判断・日常的に改善していく

Extensive Reading Time(min)

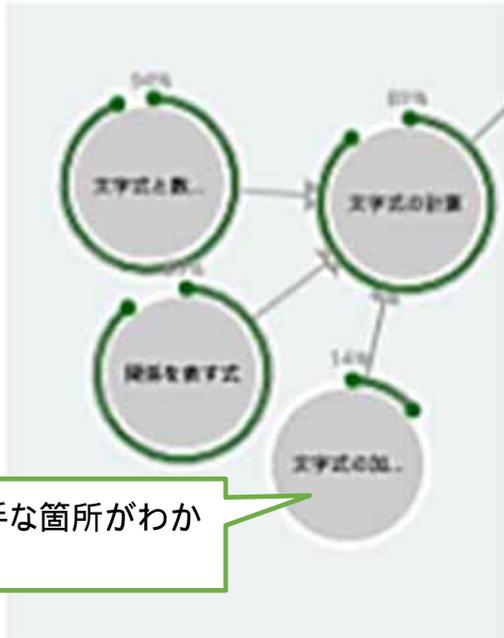
Check your and group extensive reading time from BookRoll by minutes



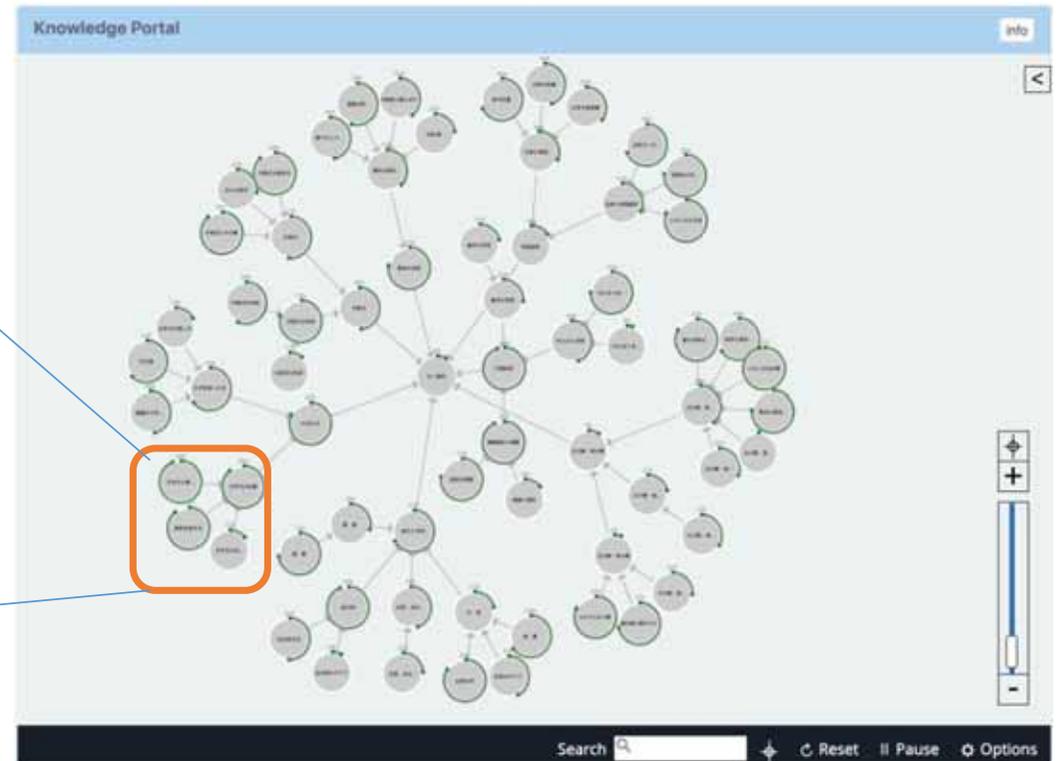
H. Li, R. Majumdar, M.-R. A. Chen, and H. Ogata, "Goal-oriented active learning (GOAL) system to promote reading engagement, self-directed learning behavior, and motivation in extensive reading," *Comput. Educ.*, vol. 171, no. 104239, p. 104239, Oct. 2021.

4. 埼玉県学力・学習状況調査 × 日常データの活用例③

学習データの蓄積によって、日常的に生徒の知識状態の把握が可能に



自分の苦手な箇所がわかる



OKLM: Open Knowledge and Learner Model

- 追加される教科書・教材からモデルを自動構築
- ユーザが確認・編集可能
- 他のシステムでも利用可能(portable)

Brendan Flanagan, Rwitajit Majumdar, Gökhan Akçapınar, Jingyun Wang and Hiroaki Ogata, Knowledge Map Creation for Modeling Learning Behaviors in Digital Learning Environments, Companion Proceedings of the 9th International Conference on Learning Analytics and Knowledge, pp.428-436, 2019.

4. 埼玉県学力・学習状況調査 × 日常データの活用例④

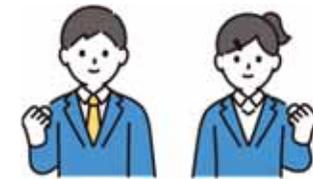
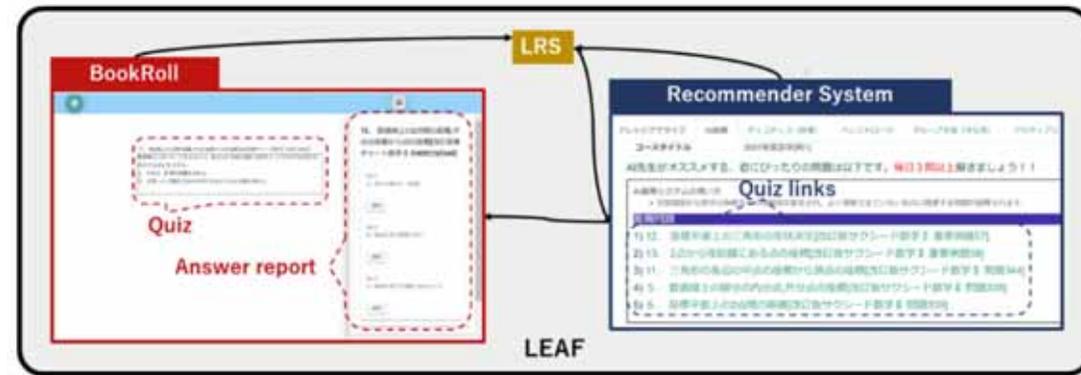
日常データが蓄積されていくことで、学習者個人に適した学習の推薦が可能に

例：英語の多読学習における絵本の推薦



Fig. 3 UI of the picture book recommender system implemented in the GOAL system

例：数学における問題の推薦



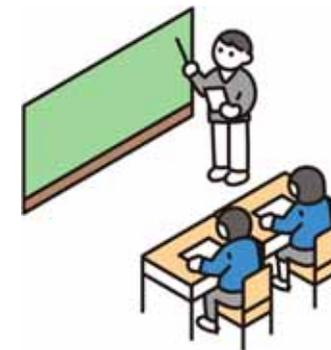
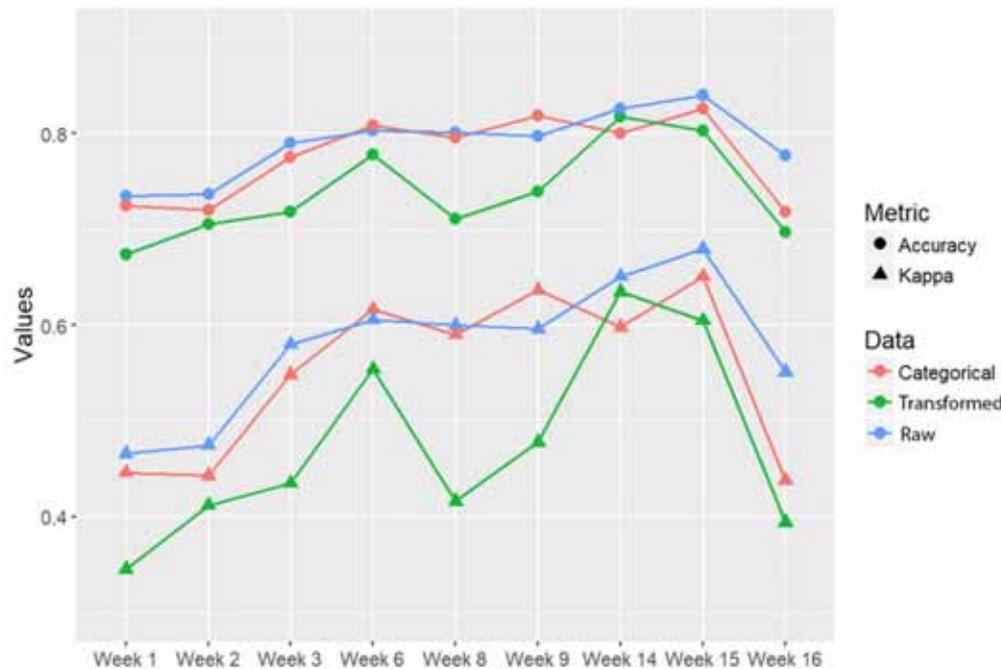
K. Takii, B. Flanagan, H. Li, Y. Yang, K. Koike, and H. Ogata, "Explainable eBook recommendation for extensive reading in K-12 EFL learning," Res. Pract. Technol. Enhanc. Learn., vol. 20, p. 027, Sep. 2024.

Y. Dai, K. Takami, B. Flanagan, and H. Ogata, "Investigation on practical effects of the explanation in a K-12 math recommender system," ICCE, Nov. 2022.

4. 埼玉県学力・学習状況調査 × 日常データの活用例⑤

日常データが蓄積されていくことで、生徒の傾向を把握・予測して指導へ

例：形成的評価の成績を早期に予測、いじめや不登校などの傾向を早めに検知するなど



G. Akçapınar, M. N. Hasnine, R. Majumdar, B. Flanagan, and H. Ogata,

“Developing an early-warning system for spotting at-risk students by using eBook interaction logs,” Smart Learn. Environ., vol. 6, no. 1, pp. 1–15, Dec. 2019.

5. 緒方研究室のLEAFシステムのご紹介

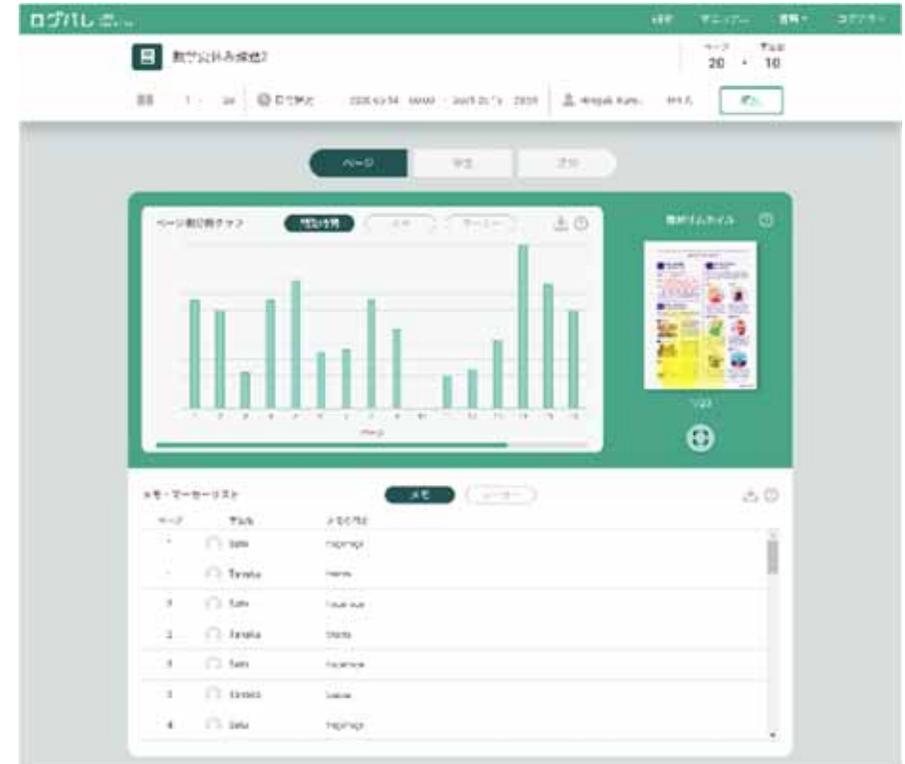


本日の発表で紹介した内容は、LEAFシステムを用いて実施されています。

LEAFシステムのWebサイト：<https://eds.let.media.kyoto-u.ac.jp/leaf/>



BookRoll



埼玉県様方式の県学調データを含めた 学習データの利活用について

2025年5月19日

Uchidayoko

Institute for Education Research

内田洋行 教育総合研究所



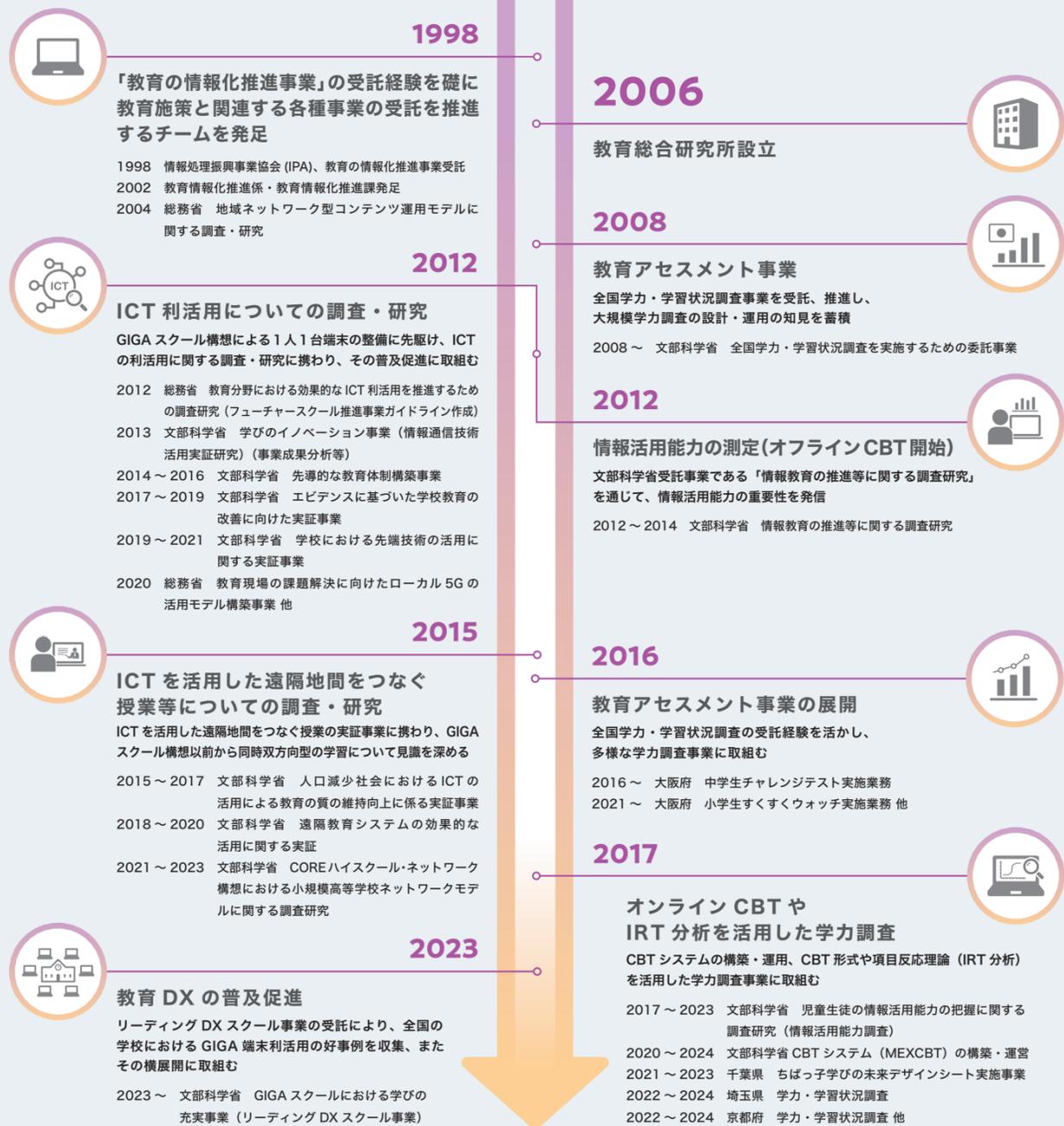
株式会社 内田洋行 教育総合研究所

所長
伊藤 博康

経歴

- 1986年4月 株式会社内田洋行 入社
- 1998年 教育総合研究所の前身プロジェクト立上
- 2008年 教育総合研究所 部長
- 2018年 ICT R&D事業部 副事業部長
- 2022年 株式会社内田洋行 執行役員
教育総合研究所 所長（～現在に至る）

(株)ウチダ人材開発センタ 取締役
 (株)インフォザイン 取締役
 ICTconnect21 学習eポータルSWG リーダー 他



内田洋行教育総合研究所

「よりよい学び」をカタチにする

内田洋行教育総合研究所は、「教育に特化したシンクタンク」としてエビデンスに基づいた質の高いサービスの提供を目指します。国内外の情勢から教育現場の実態にまで目を向けた調査・研究活動をはじめ、各種コンサルティング、データ分析、教育コミュニティづくりなどの事業を通じて、教育の質の向上に貢献します。

MISSION

- 研究する** データや観察に基づき、現状を正しく調査、研究することから課題を抽出したうえで当事者と共有します。
- デザインする** 課題に対する最適なソリューションを検討し、実現のためのアウトラインを描き、提案します。
- 実装する** 描いたグランドラインデザインを教育の現場に落とし込み、検証を繰り返しながら定着や普及のための支援を行います。



日々の学習データの活用に関する調査研究

- AIを活用した教育学習支援環境の開発に関する研究 (京都大学) 等

学力調査等の実施・活用事業

- 全国・地方自治体の学力調査の調査設計から結果返却
- 結果の活用に関する支援等

学習支援システム、活用基盤の提供

- 学習eポータルL-Gate
- MEXCBTの開発・運用
- 各種システムの連携基盤・ダッシュボードの構築 等

調査 / 研究
調査・研究

教育施策と各層の役割



国

- 教育全体の方向性を示し、全国的な学力の実態を把握する
- 制度設計・政策提言を行う

- 全国学力・学習状況調査（全国学調）の実施
- 調査結果に基づいた教育政策（学習指導要領改訂等）の立案
- 教育格差是正のための予算・支援策の提示
- 都道府県・市区町村に対する支援方針の提示と助言



都道府県

- 県全体の教育水準向上のための施策立案・支援
- 国の方針を踏まえた県独自の学力調査や支援策の実施
- 市町村教育委員会への支援と助言

- 県の学力調査の実施
- 全国学調の分析と県としての課題整理
- データを活用した教育施策の改善提案（EBPM）
- 課題に応じた研修・教材提供・指導主事派遣等の市町村支援



市町村

- 地域の学校の実情を把握し、きめ細やかな教育支援の実施
- 県や国との橋渡し役

- 学校ごとの学力状況を踏まえた支援（校内研修、外部講師派遣など）
- 教師・学校への具体的な指導助言
- 国・県の政策を地域実情に合わせて展開
- ICTや人的支援による授業改善支援
- 調査結果に基づくPDCAサイクルの実行支援



学校

- 児童生徒の学力・学習状況を直接把握・支援する現場の中心
- 教育施策の実施主体

- 日々の授業改善と個別の児童生徒支援
- 全国・県・市の調査結果の分析と課題対応
- 校内研究や授業研究の推進
- 保護者・地域との連携を通じた教育力の向上
- データに基づく授業改善





調査データ分析の各プロセスに対する支援

1 結果データの分析

結果データを集計・分析し、今あるデータから読み取れることを整理します。結果帳票だけでは把握できなかった傾向を把握します。



例

経年変化、学校別・地域別など様々な単位に応じた集計グラフの作成 等

2 課題発見・仮説検証

データから見えてくる課題を把握し、専門的な観点から仮説を検証します。調査結果以外のデータも用いて教育施策を評価することも可能です。



例

クロス集計、相関分析、重回帰分析 等



4 調査設計・改善の提案

新たな調査の企画支援や、既存の調査の設計見直しに関するご提案をいたします。

例

- 仮説立案から検証に至る分析プロセスのデザイン
- 教科の問題やアンケート調査項目の作成

企画支援
設計改善



3 課題改善・結果公表の支援

課題改善のための具体的な手立てをご提案します。教育委員会や学校からの情報発信につながるよう、分析レポートの作成や、サーベイ・フィードバック研修を実施します。



メリット

- 分析業務の負荷軽減
- 適切な分析手法を提案



学力調査分析ワークショップの実施

- 教育委員会向けや学校向け等、いずれも対応いたします。
- 自治体の集合研修から校内研修まで、規模に応じて柔軟に対応いたします。

結果帳票の見方や分析方法の説明

帳票データの種類、またデータの読み方・見るべきポイント等、分析に必要な知識についてレクチャーいたします。



メリット

- 行政職員や教員の教育データ分析力向上
- 教育データを通じた現場の議論促進、教育改善策の創出

グループワーク

調査項目ごとにグループを分け、自分の担当について結果帳票を読み取り、分析します。

国語グループ



算数グループ



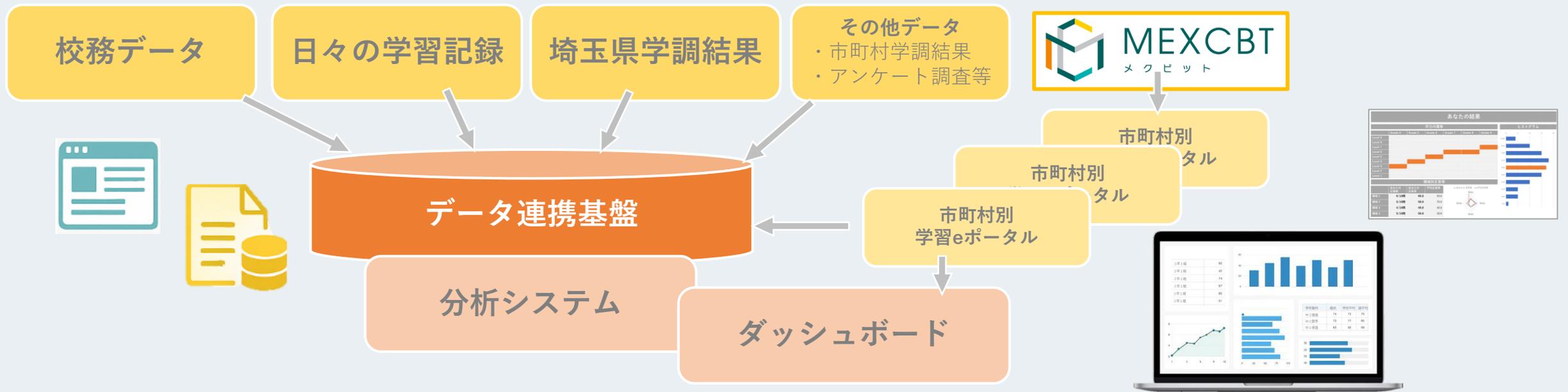
質問調査グループ



教科・質問調査の分析を
組み合わせて検討します。



学力調査を含めた各種データの活用イメージ



埼玉県

校務支援システムやデータ連携基盤等、市町村のシステムと連携し、様々なデータを集約・分析するためのデータ活用システムの提供

市町村

データを活用した分析や管下の学校全体の状況の把握を行う

- ・指導方法と成績、授業の理解度の相関等を検証

学校

各種データを活用し、ひとりひとりの児童生徒にあった指導・支援の計画立案、実施を行う

- ・出欠状況等の確認
- ・学習の理解度確認
- ・生活習慣等の把握

児童生徒

児童生徒自身で学習計画や振り返り、成果の確認をおこなう

- ・テスト結果の確認
- ・学習計画の立案
- ・学習への取組状況の確認

- ・学習eポータル（L-Gateに限らない）からのLTI連携で利用
- ・県学調の結果、日々の学習データなどを横断的にダッシュボードで参照可能
- ・学校、教育委員会向けにはデータ分析ツールを提供

調査の設計・実施

CBTシステムの活用

2008年～ 調査受託実績

調査設計

調査実施

評価分析

- ・内容設計
- ・問題作成
- ・質問設計
- ・帳票設計
- ・資料作成
- ・オーサリング
- ・環境構築
- ・実施校調整
- ・コールセンター
- ・配送・回収
- ・採点
- ・集計・分析
- ・結果提供
- ・データ分析
- ・勉強会実施



(MEXCBT・PISA2025プラットフォームとして利用)

地方自治体システム
学校ICT環境

分析コンサルティング

活用支援



ご清聴ありがとうございました。

Uchidayoko

Institute for Education Research

内田洋行 教育総合研究所

埼玉県学力・学習状況調査の今後の在り方について

～ 総括的評価と形成的評価を両立する学習評価システムの構築について ～

2025年5月19日

JIEM
株式会社教育測定研究所

■ 弊社の会社概要と本調査との関わりは下記の通り

| | |
|-------|--|
| 社名 | 株式会社 教育測定研究所 |
| 設立 | 2001年10月25日 |
| 資本金 | 7,320万円 |
| 代表取締役 | 西田 紀子 |
| 所在地 | 東京都港区港南1-8-15 Wビル13F |
| 従業員数 | 119名(2024年9月30日現在) |
| 事業内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・テスト等ライセンス事業 ・テストセンター事業 ・AI事業 ・テスト運営・受託事業 |
| 主要取引先 | 公益財団法人日本英語検定協会／株式会社旺文社／文部科学省 他 |



埼玉県学力・学習状況調査との関わり

調査初年度から令和4年度の8年間で弊社が担当

- 平成27年度 IRT分析ができる調査問題を設計作成し、**ゼロから尺度を策定**
- **初めて「学力の伸び」を測定**し、伸びを示した結果を提供
- 多角的に学力を分析できるよう、提供する種類を拡充
- 埼玉県以外の自治体(他自治体)が初めて参加
- 他自治体が本格的に参加するようになり、**同一尺度で測定**
- 新型コロナウイルスの影響により、参加可能市町村のみ実施
- PBTとは別に、CBT化に向けた試行調査を初めて実施
- 令和4年度 PBTとCBT予備調査を実施し、**IRT尺度への影響を検証**
- 令和5年度

埼玉県学力・学習状況調査

【目的】 本県の児童生徒の学力や学習に関する事項を把握することで、
教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する

- (1) エビデンスに基づく教育施策(EBPM)の実現(集団の実態を把握) → エビデンスに基づく指導改善
- (2) 個人の学びの支援 (個人の成長を把握) ←

これらの目的を引き続き達成するために、よりよいデータ取得・分析の在り方を検討したい

【課題1】 データ取得の頻度

- 日常の児童生徒の学習状況を把握し、即時に授業改善や学習状況の改善に活用することができない
- 日常の学習データ(各学校で実施する定期テストや単元テスト等、日々の一人一台端末の活用を通じて蓄積される学習データ)による代替や補完の可能性

<意見聴取の観点>

- ア 教育施策の検証のためのデータ取得・分析の在り方
- イ 児童生徒一人一人の学習状況の改善や教員の指導改善につなげるためのデータ取得・分析の在り方

【課題2】 費用対効果

- 予算の効率的な執行
- 他の学力調査との役割分担の整理 (全国学力・学習状況調査のCBT・IRT化も踏まえ)
- 調査内容や提供データ・分析方法の改善

<意見聴取の観点>

- ウ 効率的かつ効果的な施策の実施

令和7年2月19日第1回「埼玉県学力・学習状況調査の今後の在り方」に関する有識者会議資料p.18より抜粋

総括的評価と形成的評価を両立するための検討

| | 全国学力・学習状況調査 | 埼玉県学力・学習状況調査 |
|--------|---|---|
| 取得可能情報 | <ul style="list-style-type: none"> 全国と埼玉県との比較 年度の違う同学年の比較 | <ul style="list-style-type: none"> 埼玉県内での比較 年度の違う同学年の比較 同一集団の伸び 個人の伸び |
| 取得時期 | <ul style="list-style-type: none"> 小6・中3の2学年のみ | <ul style="list-style-type: none"> 小4～中3の連続する6学年 |
| 対象教科 | <ul style="list-style-type: none"> 国語・算数数学 英語と理科は3年に1回 | <ul style="list-style-type: none"> 国語・算数数学・英語 |

- 10年にわたり構築されてきた埼玉県学力・学習調査の「埼玉県スケール」は、**集団や個人の学力の伸びや比較を可能とする指標**で、PISA(国際学力到達度調査)と同様のテスト理論である項目反応理論を採用しており、**全国に先駆けた先進的な学力調査の取り組み**として高い注目を集めている
- この「埼玉県スケール」は埼玉県内における**教育施策のPDCAサイクルを回すための貴重かつ必須なデータ**となっている
- それにより、県全体や学校・個人の**学習到達度やその変化を把握**したり、**教育支援を実施**したりするだけでなく、**優れた授業や教材、指導者の育成**にもつながっている
- ただし、現在の「埼玉県スケール」は、年1回の調査を想定して設計されているため、フィードバックの回数を複数回に増やした場合、一部の児童生徒でスケール上では変化が見えにくくなる可能性があり、**形成的な評価の結果と組み合わせる**ことが望ましい

現在の埼玉県学力・学習状況調査で児童生徒のデータを取得することは残しつつ、費用の効率化やフィードバックのあり方を検討することが望ましい

【形成的評価】日常の学習データによる代替や補完の可能性

- 日々のドリルの解答結果などは、児童生徒が取り組む際の**環境や状況の影響を受けやすい**
- 定期考査は、問題や採点基準を担当教員が作成することが多く、内容も授業や教科書に準拠しているため、**結果をそのまま比較することが難しい**
- どの時点を一つの区切りとして評価し、変化を比較するのか判断が難しい

⇒ 年数回に分け、県内で共通した**学習単元の内容を深掘りした問題**を解答させることで、その**習熟度やつまずきが把握できる**フィードバックが可能となる

⇒ 日常の学習データを最大限活用するには、その結果を現在の「**埼玉県スケール**」に**紐づけて**、クラス内だけでなく、自治体間や学校間でも**客観的かつ横断的に比較できる**ことが重要

学習単元の内容を深掘りした問題を定期的に解答させ、その結果を「埼玉県スケール」に紐づけることで、習熟度やつまずきがタイムリーに把握でき、かつ、自治体、学校を横断して比較できるようになる

■ 基本的な考え方

- ① 過去10年の取り組みを最大限に活かす
- ② 費用的負担は増えない計画を目指す
- ③ 自治体や学校の負担を配慮する

| | 総括的評価 (現在の埼玉県学力・学習状況調査を改善) | 形成的評価 (新規導入) |
|-----------|--|---|
| 目的 | 前学年までの全体的な習熟度を把握する | 年度途中で習熟度やつまずきを迅速に把握する |
| 頻度 | 年1回 | 年2～3回 |
| 出題範囲 | 前学年の学習範囲から主要部分を抜粋 | 現学年の学習進捗に沿って一定範囲を深掘り |
| フィードバック内容 | ・「埼玉県スケール」に合わせた個々や集団の伸び ・各自治体や学校、クラス間での比較 | ・学習範囲を絞った習熟度のレベル ・「埼玉県スケール」上の習熟度の目安 |
| 現状からの改善点 | ・現在の実施をスリム化 ・フィードバックの早期化 | ・追加評価により習熟度把握の多頻度化 ・より具体的な内容によるフィードバック |

- 現在の埼玉県学力・学習状況調査の実施において、以下の方向性を検討することで、**一定のコスト削減を実現しながらも、結果をフィードバックするまでの期間を短縮**することが可能
 - ① 埼玉県の過去問利用(過去10年で蓄積された問題の再利用)
 - ② 他学力調査問題の過去問利用(MEXCBT等に公開されている問題の再利用)
 - ③ 選択式・短答式を中心とした自動採点化
 - ④ 帳票のデジタル化

上記を実現させることで、コスト削減の他、自治体、学校、児童生徒に対して、調査結果のフィードバック早期化も実現可能と考える

- 年2～3回、成長や振り返りを促す機会を設定
- 3週間程度の期間内に各科目1回10分程度を2～3回
- MEXCBT上で実施(個人結果紐づけの観点から)
- 既存の「埼玉県スケール」に紐づける
- フィードバックは習熟度マップ(できるようになるべき項目のリスト)にて行う

例① **思考力・判断力・表現力を中心とした記述式**
類型による正誤の採点ではなく、観点別段階別採点を実施
結果として、より多くの分析用データを取得できるようになる
将来的には自動採点を想定

例② **単元内容のまとめり別に実施する多肢選択式や短答式**
自動採点による即時フィードバック
すでにある教材やMEXCBT上に公開されている問題等を利用する前提

**問題作成や採点に費用や時間をかけず、
実施をする上で学校や先生方に負担が最小限になる運用を検討**

| | | | 国語 | | |
|-----------------------|---|------|--|---|---|
| | | | 読むこと | 書くこと | 話すこと・聞くこと |
| 高 ↑ 学 力 ↓ | A | レベル8 | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・XXXX、XXXXXXXXXX |
| | B | | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・XXXX、XXXXXXXXXX |
| | C | レベル7 | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・書いた文章を見直して修正できる | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・話し合いでの話の要点をまとめられる |
| | A | | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・意見に理由を添えて書ける | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・使う相手にふさわしい敬語で話ができる |
| | B | | ・文中の例示文が何を示すための例であるかわかる ・主語と述語の関係を読み取れる | ・自分が作った作品について、説明的な文を書ける ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・XXXX、XXXXXXXXXX |
| | C | | ・接続語などの役割がわかる ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX ・発言の順番を守る |
| | A | | ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX | ・XXXX、XXXXXXXXXX |
| | A | | | | |

各教科の習熟度マップを作成
「埼玉県スケール」と
対応付け

色の濃淡で
習熟度レベルを表示

現在の埼玉県学力・学習状況調査の
段階数とレベルを維持

【参考資料】記述式の採点イメージ

【現在の記述式採点】

解答を類型に分け、統計分析は**正誤の二値で実施**
→1問で取り出せる情報量が、多肢選択式とあまり変わらず、上位層と下位層を分けるには、問題数が必要

| 正誤 | 類型 | 説明 |
|----|-----|---------|
| 正答 | 類型1 | ○○○○○○○ |
| | 類型2 | △△△△△△ |
| 誤答 | 類型3 | ××××××× |
| | 類型9 | 上記以外 |
| | 類型0 | 無解答 |

【新しい記述式採点】

解答を観点別、段階別に分け、**統計分析は観点、段階毎に実施**
→1問で取り出せる情報量が増え、少ない問題数でも、上位層と下位層を分け、さらには、観点による強み弱みも把握することが可能になる

| 段階 | 観点1 | 観点2 | 観点3 |
|----|---------|---------|---------|
| 3 | ○○○○○○○ | ○○○○○○○ | ○○○○○○○ |
| 2 | △△△△△△ | △△△△△△ | △△△△△△ |
| 1 | ××××××× | ××××××× | ××××××× |
| 0 | 無解答 | | |

どちらも現在の「埼玉県スケール」に対応することが可能

第2回「埼玉県学力・学習状況調査の今後の在り方」に関する有識者会議

事業者提案

総括的評価と形成的評価を両立する 学習評価システムの構築について

東京書籍株式会社

2025.05.19

会社概要

東京書籍株式会社

創 業 1909(明治42)年

事業内容 小学校・中学校・高等学校の教科用図書の編集および発行を
事業の柱とし、学習教材・指導用教材、教育用デジタルコン
テンツ、[評価事業商品](#)、一般書籍他を発行。

評価事業商品

学力調査

質問紙調査

体力調査

PBT



CBT



標準学力調査CBTー連携商品サービス

学力調査CBT

Webプラットフォーム

デジタルドリル

デジタル教科書



紙の標準学力調査を発展させ、動画を活用した問題、CBTならではの問題に対応した学力調査。速報結果表示にも対応しています。

マイアセスは、CBT調査の「実施」「結果閲覧・分析」「学習・指導」をつなぐ東京書籍のWebプラットフォームです。

有償教材として販売しているタブドリLive!は、マイアセスを経由し、個々の学力調査結果に応じた問題を提供することができます。

学習者用デジタル教科書とタブドリLive!を導入することでデジタル教科書から該当の単元に応じたタブドリLive!に遷移できます。



CBTでつながる新しいまなび!のサイクル

マイアセスを中心とした
学びのサイクルを
DX商品の連携でもっと
深めることができます。

調査

調査を通して、学力等の状況確かめる

標準学力調査CBT / i-check CBT

「マイアセスCBT」は、マイアセス経由でCBTを実施できるサービスです。標準学力調査CBT、i-check CBTを提供しています。



総括的評価

学習・指導

結果を踏まえて、苦手を解消し、
得意を伸ばす

学びをひろげる 教材連携

マイアセスでは、学力調査の結果に応じたデジタルドリル教材を提供します。自分の得意や苦手に沿った教材で、効果的に復習することができます。

形成的評価

マイアセス



結果閲覧・分析

集団／個人／自分の“今”の
状況を把握する

マイアセス 結果資料

調査結果は、マイアセスの「Webカルテ」で返却します。「Webカルテ」には、教育委員会用の「教育委員会カルテ」、学校の先生用の「学校カルテ」、「子どもカルテ」、児童生徒用の「マイカルテ」があり、それぞれの対象者に特化した内容を提供しています。標準学力調査CBTを実施の場合は、紙の調査より早く結果を閲覧することができます。



総括的評価としての標準学力調査CBT

標準学力調査 CBT

380円(税込)
各学年1教科

※令和7年度現在

- 実施時期
1学期版▶4月～6月
3学期版▶12月～2月下旬
- 学年教科
小3～中3／国語・算数数学・英語・理科・社会
- 出題範囲
1学期版▶前学年の学習内容(中学校1年生は小学校内容)
3学期版▶当該学年11月までの学習内容
- 実施時間
小学校:40分／中学校:45分
- 出題内容
動画(音声)活用問題、キーボード操作問題
長文入力問題(小学校4年生3学期版以降)
- 導入理論
IRT(項目反応理論)／LRT(潜在ランク理論)

標準学力調査CBTの導入テスト理論:IRTとLRT

- 学力指標:IRTとLRTの併用から、学力を多角的に深く捉えることが可能
 - 学力という多面的な構成概念を理解する上で、互いに補完し合う情報を提供。
- IRTとLRT併用の意義

| | IRT | LRT |
|-------|--|---|
| 学力指標 | 能力値(IRTにより推定された能力値) | 潜在ランク(レベル) |
| 尺度の種類 | 連続尺度 | 順序尺度 |
| 特徴 | 個人の能力を高い精度で識別 より客観的な評価を実現 精密な比較が可能 | 測定誤差や僅かな点差の解釈の曖昧さを回避 同一レベル集団の質的特徴・共通課題を探ることが可能 |

IRTとLRTを組み合わせることで、各指標が単独で提供する情報を超えて、より深い洞察を実現
 =IRT:能力値スコアの高さに現れる量的評価、LRT:質的に異なる解答パフォーマンスのプロファイル

※等化による厳密な経年比較は現時点では行われていないが、毎年の受検者集団の特性が大きく変動せず、比較的一定であるとみなして、学力指標の経年的な変化を見取り、一定の示唆を得ることは可能。

形成的評価としてのタブドリLive！



550円(税込)
1教科1年間

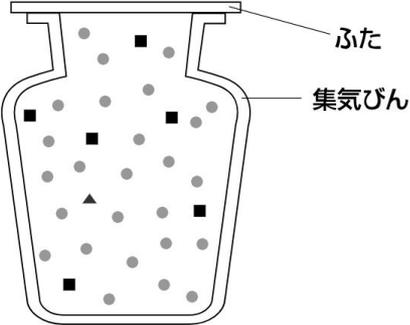
※令和7年度現在

- 学年教科 小1～中3／国語・算数数学・理科・社会・英語
- 総問題数 約17万問
- 出題形式 キーボード入力、手書き入力、線結びなど11種類
- 出題内容 教科書単元・小単元に応じた確認問題、先生からの課題問題
作図問題、長文読解問題、学習履歴に応じた個別最適問題
- 付帯機能 自動採点、解説動画、正誤情報、点数・所要時間、メモ機能
学習者用デジタル教科書との連携、標準学力調査との連携
- 管理機能 学級傾向確認、個別状況確認、正誤情報・回答内容確認
成績変化確認、学習履歴のマイアセス蓄積・ダウンロード

形成的評価としてのタブドリLive!

タブドリLive!は、国語・算数数学・理科・社会・英語の5教科の様々な出題形式の問題に取り組めるデジタルドリルです。

1 集気びんの中に火のついたろうそくを入
火が消えた後

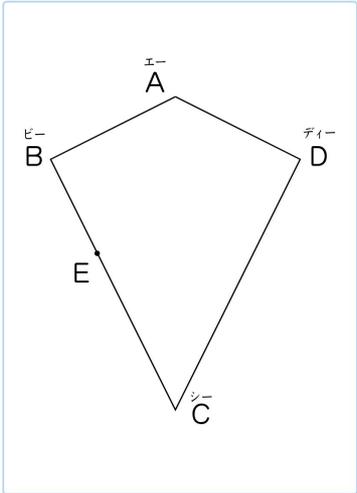


ふた
集気びん

(4) (3)で■が減った理由も答えなさい。

答え (例) ろうそくが燃えるときに使われたから。

(2) 点E¹に対応する点をかきましょう。



1 次の物語を読んで答えましょう。

いかりを下ろし、^①海に飛びこんだ。はだに水の感
しよくがこちよいい。海中に棒になって差しこんだ光
が、波の動きにつれ、かがやきながら交差する。耳には
何も聞こえなかったが、太^た一^{いち}はそう大な音楽を聞いている
ような気分になった。^②どうとう父の海にやってきた
のだ。

(1) 「^①海に飛びこんだ」とありますが、海の中にいる太一
は、何を聞いているような気分になりましたか。文章中か
ら書きぬきましょう。

形成的評価としてのタブドリLive !

ドリルの結果は点数化されます。

教員用の管理画面では、クラスや学年のドリルの平均点が表示され、所属の県や全国の平均点との比較が可能です。
また、先生のみが配信できる問題を活用することで、より精度の高い評価を行うことができます(算数数学のみ)。

所属するグループ
6年1組
比較するグループ
全国の6年生
学校
小学校
教科
国語 社会 **算数** 理科 英語
学年
6年

絞り込む

集計日時: 2025.04.22 02:30 / 次回の集計日時: 2025.04.23 05:00
 学習状況 / 100% 50%以上 1%以上 0%

所属
比較

1. 対称な図形 2 65点 77点

1. 線対称 63点 77点 ▽

2. 点対称 85点 85点 ▽

3. 多角形と対称 67点 83点 ▽

「対称な図形」のまとめ (1) 86点 89点 ▽

▲クラスのドリルの取組状況・点数
(比較対象:全国)

| 出席番号 | 学習者 | 学習日時 | 点数 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|------|----------|---------------------|------|---|---|---|---|---|
| 1 | qgn1BaGx | 2025.04.20 12:37 | 0点 | × | × | × | × | × |
| 2 | UDXnor2E | 2025.04.20 19:54 | 80点 | × | 🌸 | 🌸 | 🌸 | 🌸 |
| 3 | vHVIWKP8 | 2025.04.15 16:28 | 80点 | × | 🌸 | 🌸 | 🌸 | 🌸 |
| 4 | PH3vSPeM | 2025.04.16 14:59 | 80点 | × | 🌸 | 🌸 | 🌸 | 🌸 |
| 5 | PxrlyZ4k | 2025.04.17 10:47 | 100点 | 🌸 | 🌸 | 🌸 | 🌸 | 🌸 |
| 6 | h4TzDvWB | 2025.04.14 16:49 | 40点 | × | 🌸 | × | 🌸 | × |
| 7 | fN4ZxNAi | 未学習 | 一点 | | | | | |
| 8 | lBkJJl4e | 2025.04.16 15:33 | 80点 | × | 🌸 | 🌸 | 🌸 | 🌸 |
| 9 | L3hRyXSM | 2025.04.11 11:15 | 60点 | × | 🌸 | × | 🌸 | 🌸 |

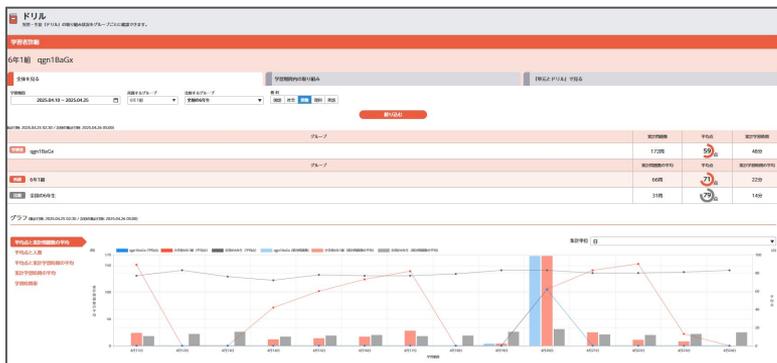
▲クラスのドリルの取組状況(個人別)

@ 2025 TOKYO SHOSEKI CO., LTD. All rights reserved.

形成的評価を生かした日常の学習と指導

先生

児童生徒の学習状況・点数や相対的位置を把握することで、指導改善や指導の個別化に役立てることができます。



▲子どもの日々の取組状況 (比較対象: クラス・全国)

1 計算をしましょう。

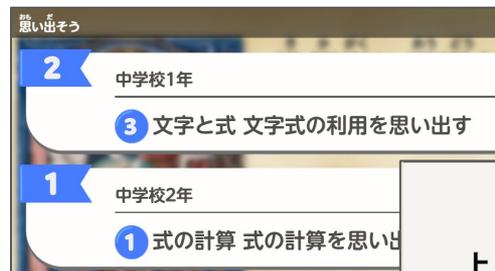
$$\frac{5}{9} \times 2$$

$$\frac{5 \times 2}{9} = \frac{10}{9} = 1 \frac{1}{9}$$

◀子どものメモも確認可能

児童生徒

既習事項の確認や動画による学習から、自らに必要な学びを選択できます。AIで自らの回答傾向に応じた問題を解くこともできます。



◀学年をまたがる既習事項の復習



▲各教科に用意されている学習動画

◀学習者の回答傾向に応じたドリル



東京書籍の考える学習評価システムの現在地

形成的評価における項目とデータ入手方法構築

* デジタル教科書やタブドリLive! における問題項目へのパラメータ付与に課題

* 日常(授業・教科書を使用)の学習と指導における評価及び学習履歴のデータ化と蓄積に課題

標準学力調査 CBT

形成的評価・日常の学習と指導との連動と、今後の政策立案への寄与

* 日常の学習と指導に作用する評価材料に課題

* 将来に向けた課題の顕在化に課題

児童生徒一人一人の
学力を確実に伸ばす
包括的評価システム



タブドリ
+able+ drill Live!

マイアセス

東京書籍の考える学習評価システムの未来図

IRT・LRTを活用したアダプティブな 形成的評価の強化

*項目バンクによる項目一元管理
デジタル教科書、タブドリLive!などの個々の
問題項目にIRT・LRTに基づくパラメータを付与

*学習プロセス中へのフィードバックの提供
学習と指導の改善に向けた材料の提供と、総括
的評価を基にした、つまずき予測と教材反映

※評価材、評価基準、学習の文脈は多様



標準学力調査 CBT

教育委員会・学校により有用な 総括的評価の充実

*学習成果から見える課題発見と改善策
授業・教科書(学習指導要領)を軸とした学びの
保証を実現する評価材料の提供

児童生徒一人一人の
学力を確実に伸ばす
包括的評価システム

*EBPMに役立つ情報・資料の提供
学校間格差や地域間格差など公教育における課
題の顕在化

※標準化された指標と信頼性の高い評価基準

タブドリ
+able+ drill Live!

マイアセス

協議の視点

日々の学習データを効果的・効率的に活用することで、県学調が担う役割(※)を果たすことができるか。

※本県の児童生徒の学力や学習に関する事項を把握することで、

①教育施策の検証、②教員の指導改善、③児童生徒の学力向上を推進

検討の視点

形成的評価と総括的評価の固有の役割を踏まえ、

- ・日々の学習データの活用により県学調を代替可能か
- ・(一部)可能である場合の実現可能性、実現までの時間軸、コスト、留意点は何か



埼玉県学力・学習状況調査が担う役割

教育委員会

教育施策



学校

授業



児童生徒・保護者

学習

県学調による検証

①教育施策の検証

- ・伸ばしている学校や学級、教員の把握
- ・県教委による支援や人的配置の効果検証

【県で実施している主な施策】

- ・優れた指導技術の共有・普及
 - 映像作成
 - アクションリサーチ
- ・「主体的・対話的で深い学び」の視点による質問調査
- ・学級経営リーフレット
- ・「未来を行く抜く人財育成」学力保障スクラム事業
- ・学力向上プロジェクト教員の配置

学級経営

主体的・対話的で深い学び

学習方略

学力
(認知能力)

非認知能力



②教員の指導改善

- ・校内研修で自校の結果を分析
- ・分析結果に基づく授業改善
- ・学校のPDCAサイクルのC機能

③児童生徒の学力向上を推進

- ・伸びを実感し、自己効力感を高め、次の学びへ挑戦
- ・保護者といっしょに「よいところ」「努力が必要なところ」を把握

一人一人が自分の成長を実感する!



総括的評価

形成的評価